

幼児の手伝いの実態と親の態度

○山口 茂嘉, 笹辺 美和子
(岡山大学教育学部)

1. 研究目的

子どもの幸せを願わない親はいない。

A. Adlerは、幸せの条件として次の3つを挙げている。

- ①自分の短所も長所も含めて、自分自身を肯定的に受け入れられること(自己受容)。
- ②相手の人を、信頼できること(他者信頼)。
- ③相手の人のために役に立てること、立っていると感じられること(貢献感)。

そして、これらの条件は、乳幼児期の親子関係を通じて、その人のライフスタイルとして10歳頃までに確立されると彼は考えている。

昭和54年、総理府が、国際児童年の事業として、日本、アメリカ、イギリス、フランス、タイ及び韓国の6か国における10歳から15歳までの児童を対象に、意識と生活実態を調査した。その結果、この6か国の中で、一番、手伝いの時間が短かいのが日本の子どもであった。

子どもたちは、家庭の中での手伝いを通して、人のために役立てる喜び(貢献感)を身につけていく。しかし、「お手伝いなどしなくてもよい、お勉強しなさい」と勉強の意義は認めても、手伝いの意義を正しく認識している親が、わが国では、少なくなっているのではないと思う。その結果として、まわりの人からいろんなことをしてもらうのが当たり前で、自分が相手のために役に立った喜びを体験しないまま大きくなった、「してもらって当たり前人間」となり、してもらって当たり前、してもらえなければ不平・不満ばかりの欠陥人間が、増加している。これは、とても不幸なことである。われわれが勉強するのは、より多くの知識や技術を身につけて、より多くの人たちの役に立つためである。相手のために役に立つ喜び、「働くこと」の本当の意義が見失われて、ただ「学ぶこと」のみが、根なし草のように肥大してしまったところに、わが国の教育のむなしさがある。

乳幼児期は、まわりの人の模倣によって、いろんなことを身につけていく時期である。この時期からなら、手伝いを好きにするのは、そう無理ではないし、その子の一生の幸せを考えると、とても大切なことである。本研究では、上述のような観点から、幼児期の手伝

いの実態と、それに対する親の態度を明らかにし、考察を加える。

2. 研究方法

対象：岡山県下の3～6歳の幼稚園児、計618名とその母親。回収率は、88.7%で、分析の対象としたのは、農村地域のA園176名、市街地域のB園232名、岡大附属C園140名の、男子263名、女子285名、計548名である。平均年齢は、5歳4か月であった。

調査期間：昭和60年10月15日～30日

調査用紙：「子どもの勤労観に関する調査」(1980)などを参考にして、手伝いの実態に関する7項目、それに対する親の態度10項目、母親の定職の有無など付帯質問6項目の計23項目から成る質問紙を作成し、園を通じて、配布、回収した。

3. 結果と考察

Q1. あなたのお子さんは、家の手伝いをしますか、では、よくする17.9%、ときどきする73.7%、ほとんどしない8.2%、全くしない0.2%であった。地域差はみられなかった。年齢が増すほど手伝いもよくする傾向がみられ、6歳児では、よくするが26.1%であった。女子20.7%の方が男子14.8%よりもよく手伝いをしていた($\chi^2=7.38$, $df=3$, $P<.10$)。

Q2. その時、お子さんの様子はとうですか、では、自主的にする47.3%、言われたことだけする50.2%、いやいやする2.2%、けっしてしない0%であった。自主的にするのは女子52.4%(男子41.8%)であった($\chi^2=7.58$, $df=2$, $P<.05$)。母親が外で働いている群と母親が家に居る群に分けて比較すると、自主的に手伝うと答えたものが前者で57.6%、後者で45.8%であった($\chi^2=5.21$, $df=2$, $P<.10$)。

Q3. どんな手伝いをしますか、での、一人当りの手伝い数の平均は、4.8であった。そして、子どもがよくしている手伝いの上位5つは、①食事の後片付け

表1. お手伝いベスト5の性差

性別	男 子	女 子
1	食事の後片付け (13.6%)	食事の後片付け (14.5%)
2	おつかい (12.1%)	食器を食卓に並べる (11.7%)
3	新聞・牛乳取り入れ (11.6%)	おつかい (11.1%)
4	食器を食卓に並べる (8.9%)	洗濯物 (9.9%)
5	留守番 (8.9%)	調理に参加する (8.4%)

14.1%、②おっかい11.6%、③食器を並べる11.4%、④新聞・牛乳などの取り入れ9.1%、⑤調理に参加する8.0%であった。表1に示すように、手伝いの種類と順位にやや性差がみられた。これら手伝いの数や種類に、地域差はみられなかった。

Q4. 毎日、何か決まった手伝いをしますか、では、はい31.8%、いいえ68.2%であり、約3割の子どもが家庭の中で決まった役割を果たしていた。その手伝いの平均時間は、6.4分で、比較的短時間で済む簡単な手伝いが多かった。A園とC園の間には、差がみられた($\chi^2=5.05$, $df=1$, $P<.05$)。すなわち、親の教育意識の高いと考えられるC園の方が、子どもに決まった手伝いをさせているということである。

母親の仕事と決まった手伝いをしている子どもの割合を比べてみると、図1に示すように、母親がパートに出ている子どもが一番、決まった手伝いをしていることがわかる。

Q5. あなたのお子さんの家の手伝いについて、どうお考えですか、では、もっと手伝ってほしい40.8%、今の程度でよい58.9%、手伝いなどあまりしなくてよい0.4%であった。これにも、地域差や性差は、みられなかった。

Q6. あなたは、主にどんな理由からお子さんに手伝いをさせるのですか、では、自分が忙しいから11.9%、子どもがやりたがるから32.3%、しつけとして51.4%、その他4.4%であり、過半数の親が、しつけを意識して手伝いをさせていることがわかる。母親の仕事との間には、関係はみられなかった。このことから考えて、昔のように親が忙しいから子どもに手伝いをさせるのとは異なってきているように思う。

Q7. あなたは、わざわざ手伝いを作って、お子さんにさせることがありますか、では、ある55.9%、ない43.9%であり、Q6の場合と同様に、過半数の親がしつけを意識して、手伝いをわざわざ作ってさせていることがわかる。その具体的な理由をいくつか列挙すると、

- ・他人に用件を伝える練習をさせるため
- ・金銭感覚を養わせるため
- ・自分で作ったものは必ず食べてくれるので
- ・不器用なので、生活能力を身につけさせるため
- ・刃物に慣れさせるため

- ・親子のコミュニケーションを図るため
- ・命の大切さを教えるため(動・植物の世話)
- ・やさしさ、忍耐力、兄弟愛を育てるため(子守り)
- ・先祖を大切にすることの気持ちを養うため(お供え)
- ・労働を苦にしない子になってほしいから など。

逆に、わざわざ手伝いを作ってまでさせることがない」と答えた理由を列挙すると、

- ・お手伝いをわざわざ作らなくても十分あるから
- ・今は、遊びに忙しく、不在であることが多いから
- ・忙しいので、もたもたされると困るので
- ・親に心の余裕がないから
- ・親が忙しければ、自然に手伝うようになるから
- ・自主的でなければ、続かないし、意味がないと思うので
- ・自然に任せた方が良いと思うので など。

Q8. お子さんが手伝いを終えた時、どんな態度で臨みますか、では、大げさに喜んでみせる15.0%、いつもほめる57.2%、時々ほめる22.9%、あまりほめない1.1%であった。約7割の親が、子どもの手伝いに対して積極的にほめる態度で臨んでいることがわかる。これにもA園とC園の間に差がみられた($\chi^2=16.59$, $df=3$, $P<.001$)。すなわち、C園の親は、かなり意識的に子どもの手伝いをほめるようにしているようである。

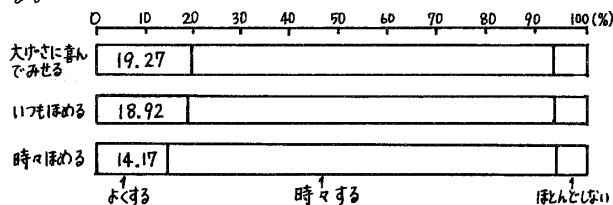


図2. 母親の態度と子どもの手伝いの状況

母親の態度と子どもの手伝いの状況をクロスさせると図2のように、やはりよくほめる方が、子どももよく手伝いをする事がわかる。

Q9. お子さんが手伝いをした場合、何かごほうびを与えることがありますか、では、よく与える0.5%、時々与える22.4%、与えない77.0%であった。母親の仕事との関係では、パートに出ている母親の場合が、時々与えるが45.2%と他の群より高い。その理由も、パートに出ている母親は、特別深く考えずに26.3%で、他の群より高かった。

4. 結論

昔とはちがって、親が忙しいから手伝いをさせるのではなく、子どもに生活能力を身につけさせるという教育的配慮から行なわれていることが明らかになった。

本調査にご協力下さいました見戸利久子さんに感謝します。